



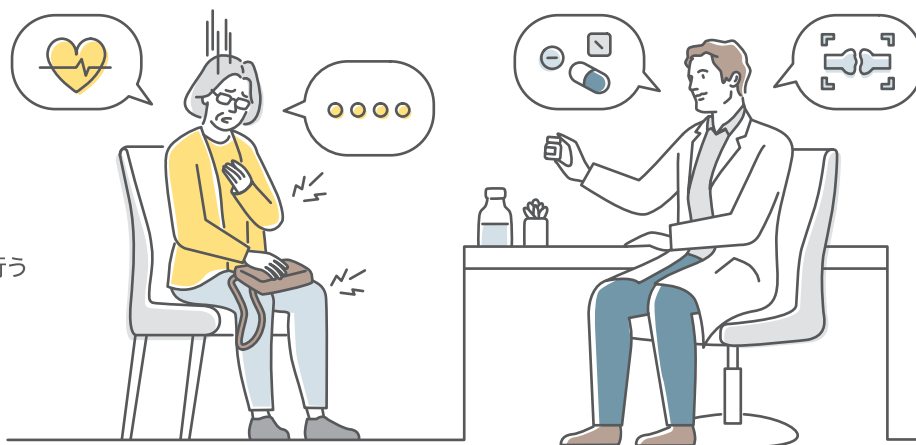
病院を家庭に、家庭で炎症コントロール

負荷をかけずに健康管理したい

現実

糖尿病やがんなど、
生活習慣病は病院で診療する

- 詳細な検査や大規模な治療は通院して行う
- 通院の回数は限定的であり、通院自体が患者の負担になる
- 病院が遠い地域では受診が遅れることも

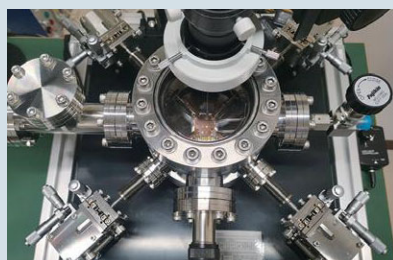


DREAMING POWER

「メディカルネットワーク」の構築

夢が叶った世界

- 身体データを家庭で手軽に収集し、生活習慣病を未病のうちに発見・治療
- 医療の地域格差をなくし、全国どこでも同様に受けられる健康医療サービスを確立



皮膚ガスを模擬した極低濃度ガス測定装置

メディカルネットワーク

家庭でスマートデジタル機器を通じて収集した「皮膚ガス」(皮膚の表面から放出される気体)のデータを、医療機関で分析・診断。家庭と医療機関をつなぐネットワークによって、通院の難しい人も自宅で検査や診察が受けられるようになります。遠隔医療に革新をもたらし、生活習慣病に悩まされない社会を実現する仕組みです。



病院を家庭に、家庭で炎症コントロール
負荷をかけずに健康管理したい

FOR THE FUTURE

将来に向けて

病院と家庭をデジタル機器でつなぎ、
誰もが生活習慣病を克服できる社会を目指します。

健康状態の指標となる「皮膚ガス」を計測するスマートデジタル機器を開発し、生活習慣病を引き起こす慢性炎症の状態を在宅で診断、病気の超早期発見を可能にします。機器によって病院と家庭をつなぐ「メディカルネットワーク」の構築とともに、電気・磁気刺激など、運動に似た効果をもたらす治療法や薬の研究開発も進行中です。遠隔医療が実現し、家庭で慢性炎症コントロールが可能となって生活習慣病が克服されることは、超高齢社会の日本において大変意義のあることです。

- 「皮膚ガス」データの収集により、どこでも無意識のうちに、身体に負担をかけずに炎症状態を知ることができる
- 運動に似た効果をもたらす治療法や薬により、革新的な遠隔医療が実現される社会へ

- 「皮膚ガス」のデータを収集・分析するシステムを構築し、運動・睡眠・食に関するデータと合わせて活用する
- 慢性炎症の状態を日常生活の中で計測できる、スマートデジタル機器の開発
- 運動の代替となる治療法を開発し、個々人に合った治療を在宅で実施

現状



2030
TARGET

2040
BREAKTHROUGH



NANGAKU Masaomi



南学 正臣 プロジェクトマネージャー
東京大学医学部附属病院 教授

1988年 東京大学医学部卒業、1994年 ワシントン大学腎臓内科、2012年 東京大学大学院医学系研究科 腎臓・内分泌内科 教授、2023年 東京大学大学院医学系研究科研究科長・医学部長。

現在、国際腎臓学会理事長、日本内科学会理事長、日本腎臓学会理事長。酸素生物学に基づく腎臓病の病態解明と治療法の開発を行うとともに、遠隔医療の適正な発展のための様々な提言を日本医学会連合で取り纏め、革新的遠隔医療の開発に取り組んでいる。